

## 子どもには密が必要

仙田 満  
(環境建築家)

コロナ禍と呼ばれる状況が、このように大きく世界的に、社会経済的に影響を与えることを、今年初めに誰が想像できただろうか。コロナウイルスはほんの数か月の内に世界中に広がった。わが国はロックダウンには至らなかったが、4月7日に緊急事態宣言が発令され、自粛生活を余儀なくされ、保育園・幼稚園・こども園は休園、学校は休校措置がとられた。5月25日に全国的に宣言は解除され日常的な生活に戻りつつあるが、その後も東京では連日100人以上の新規感染者が報告されている。コロナウイルスの第2波、第3波も予想され、今後2、3年はウィズコロナの生活を覚悟しなくてはならない。

その中で、生命を守るための新たな生活様式が提案されている。手洗い、うがい、マスクを着ける、3密を避け、社会的距離約2メートルを守って行動することが求められている。しかし、これらの提案は生命と経済という医療や社会的な問題を主眼としており、子どもの教育、教育という観点からの議論がなされていないことは、極めて問題であると考えている。子どもの1日、1週間、1か月は大人のそれとは異なる。もっと凝縮したものだ。それを2メートル離す生活は子どものあそび、すなわち学びの機会を奪うものだ。

私は「子どもを守るためにどのような行動す

べきか」という点から、代表を務めることも環境学会のホームページにおいて、「画一的な新たな生活様式を求めるのではなく、年齢層別のガイドラインをつくるべきだ」というメッセージを発信した\*。

こどもの成長において密接は重要である。こどもは触れ合うことによって成長していく。体を接触させることによりさまざまな感覚を発達させていく。多くのスポーツも体を触れ、ぶつけ合う。こどもにとってあそびは「まなび」なのだ。人間のさまざまな力はこども時代に育まれる。その機会を奪わないで欲しい。

コロナウイルス感染症は高齢者が重症化しやすいと言われている。従って高齢者が感染のリスクを避けるために、非接触型の生活を余儀なくされてもやむを得ない。大人が非接触型の生活をするのも致し方ない。

しかし、こどもの重症化率は低いと言われて

いる。確かにこどもが亡くなった例もテレビで紹介された。しかし、こどもの感染率も死亡率も圧倒的に低い。こどもは保育園、幼稚園、学校で一緒にあそび、まなび、接触を通して成育して行く必要がある。

そのため、新たな生活様式という画一的なものではなく、小さなこども、学童、青年というようにそれぞれの年齢層に合わせた生活様式のガイドラインを示すべきと思われる。

保育園でこどもが2メートルの間隔をあけて行動している映像が報道されているが、とても違和感を覚える。人間は動物である。かつて動物学者H・ヘイガーによって動物と距離について、個体距離と社会距離という2つの概念が示された。個体距離とは個体としての生物が自己と他者を分けるバランスの良い距離である。社会距離とは群として動物が社会を形成する距離をいう。「社会的距離（ソーシャルディスタンス）」が今回重要だと指摘されている。これは患

者の飛沫に影響を受けない距離という意味で使われているので、社会的距離と名付けられているが、これはH・ヘディガーやその距離を人間に応用したエドワード・ホルルの個体距離の概念に近いと思われる。

問題はこどもにとって個体距離ゼロ（密接距離）の中でこそ安心・安全を感じることができるということである。ジョン・ポウルビーのアタッチメント（愛着）理論に示されるように、こども達は触れる、触れられる、いだかれる事によって安心を得て、外界へ挑戦できる。そして成長して行く。

そのような親密な関係をコロナウィルスの影響で悪いものだという意識を植え付けられてしまうことがとても心配だ。今回の問題はコロナ対策のための一時的なライフスタイルといえるかもしれない。しかし2年も3年も続くとも言われており、それがこども達にとって習慣化してしまう事が心配だ。

このメッセージに対して、多くの小児医科学、保育学関係者より賛同のコメントが寄せられた。こども環境学会会員のうち、医療関係者はあまり多くないにもかかわらず、多くの小児科医より賛同いただいたことに正直驚き、責任の重さを感じた。

私は建築家である。子どもの成育環境を空間づくりという観点から研究し、デザインしている。最近、ある幼稚園で小上がり直径1メートル程度の穴を開けたところ、子どもにも大変人気となった。子どもは穴の中に一人で入って本を読んだり、大勢で入っておしくらまんじゅうをしたりして遊ぶ。

子どもは体を寄せあつて、安心する、一体感をもつ、共感する。体を寄せあう行為が子どもの育ちにとってとても重要なことだと実感してい



▲越谷くるみ幼稚園（埼玉県）  
絵本コーナー 一人で穴の中に座って読む。



▲ちぐさこども園（群馬県）  
絵本コーナー みんなで集まって読む。

る。この写真を見ると誰もがうなずく。子どもの成育環境の役割のひとつは、共感を体験することではないかと考えている。共感することとは、生存のために極めて重要な感覚であり、それをあそびながら体験することは大切だ。体を寄せ合わせながらあそび、学ぶ体験は忘れられない。

密接な空間こそが子どもに安心感や居心地の良さを与える。マスクを着け、2メートル離され、食事をし、話してはいけないという生活が強いられるため、「園に行きたくない」という子どもが増えていると聞く。

私たちはコロナ禍においても小さな子どもにとっては個体距離ゼロの世界こそ重要であることを認識し、子どもの代理人として発信していくべきではないだろうか、と考えている。

例えば社会的距離のガイドラインを、6歳まではゼロ、7歳から12歳までは1メートル、13歳から18歳までは1.5メートル、18歳を超えたら2メートルと年齢ごとに設けることにより、保護者、保育者、教育者は気持ちが悪くなり、子どもが自由にのびのびあそべるようになるのではないだろうか。子どもの時間はかけがえないものだ。大人が奪ってよいものではない。確かに園もクラスターになる可能性はある。しかし今のところ幼稚園、保育園、こども園がクラスターになった事例は伝えられていない。私はあらゆる政策は子ども第一、子どもを最優先にすべきと考え、「こども第一運動」を唱えている。子どものために私たちはもっと大きな声で年齢別ガイドラインの設置を主張しよう。

\*メッセージ掲載サイト（こども環境学会ホームページ）  
[http://www.children-envy.org/magazine/blogs/blog\\_entries/view/10/1456b3e68919e2fd41fb62dbe040045](http://www.children-envy.org/magazine/blogs/blog_entries/view/10/1456b3e68919e2fd41fb62dbe040045)